

「ぶんせき」の現在と未来



川原 正博

「ぶんせき」誌は本号で通巻 528 号を迎えます。学生時代から読んでいた「ぶんせき」誌の編集に携わるようになるとは思っていませんでしたが、編集委員を拝命して早くも 5 年になります。編集委員会に入って驚いたのは、編集委員の業務の多さと委員の熱心さです。例えば、毎年度の“特集”テーマに関しては、各委員から提案されたテーマをいくつかのカテゴリーに分けた後、委員会で投票して決定します。その後、特集小委員会を結成して執筆者を決定し内諾をとりますが、原稿が出来上がってからもぶんせき原稿としてふさわしいかどうかを査読や校正を行いチェックします。年に一度泊まり込みの合宿形式で編集委員会を行って様々なアイデアを出し合い、活発な議論を行っています。また、編集委員会では毎号の目次に関して、時には 1 時間以上かけて、読者がわかりやすいように一字一句精査しています。さらに今年度も“ぶんせき Q&A”や“先端機器開発”など新しい試みを始めています。皆様のお手元に届く「ぶんせき」はこのような著者と編集委員の努力があって形成されているということを知っていただければ幸いです。

とはいえ、学生の教育に携わっている身からすると、「ぶんせき」誌そして分析化学には一つの課題が残されているのではと最近考えています。毎年新入生に初回講義を行う際に、“分析ってなんのことか知ってる？”と聞いてみるのですが、ほとんどの学生は首を振っています。高校で習う滴定などの例を挙げても、計算問題ばかりということでむしろ苦手意識を持っている学生が多いようで、“はかる”ことの面白さを教えたいと思っていますが、限られた時間の中ではなかなか上手くいかず苦勞しています。一方で、オープンキャンパス、高校生向け講演会や日本学術振興会“ひらめきときめきサイエンス”事業などで中学高校生に接すると、science に決して興味を持っている学生は決して少なくはなく、興味のある分野に関しては熱心な学生も多いと感じています。その意味で、日本分析化学会が教育会員やジュニア会員の制度を新設したことは歓迎すべきだと思います。しかしながら、今の「ぶんせき」あるいは他の雑誌や出版物で中学・高校生が興味をひく記事があるでしょうか？ 例えば、筆者の所属する日本薬学会では、「高校生のための薬学への招待」等のパンフレットを以前より作成しておりますし、各支部でも高校生向けの公開講演会を企画しています。若い世代に分析化学の面白さを伝えて、興味を持つ学生を増やしていくことが分析化学の将来につながるのではないかと考えています。まだ漠然とした考えですが、何かアイデアがございましたら編集委員会にお伝えいただければ幸いです。

〔Masahiro KAWAHARA, 武蔵野大学薬学部, 「ぶんせき」編集理事〕